



野生動物医学修士課程開講 10 周年記念シンポ — 関連分野への人材供給の足跡 —

浅川満彦 (酪農学園大学獣医学部)
齋藤慶輔 (北海道野生生物保護公社)

はじめに

野生動物あるいは動物園動物に関わる職域を目指すため、優秀な若者が難関の獣医大学の門をくぐる。が、関連就職機会があまりにも少ない現実を知り、多くは挫折。獣医大に勤務するものにとっては、毎年繰り返される珍しくもない話。しかし、そのような夢に近づける現実的な方法の 1 つが、国外専門職大学院への進学であろうか。

ロンドン大学 Royal Veterinary College (RVC) とロンドン動物学会 Zoological Society of London (ZSL) で共同開講の専門職大学院「野生動物医学修士課程 Master of Science in Wild Animal Health (MSc WAH)」が、今年で創立 10 周年を迎えた。これを記念して、2004 年 11 月 12 日から 14 日、ロンドン動物園講堂で、RVC と ZSL が英国動物園獣医師会 BVZS、世界野生動物獣医師会 WAWV との合同シンポジウムを開催した。式典は、英国にて開催されたエキゾチック、動物園および野生動物医学大会の研究報告会を兼ねたものであり、世界中に散らばっている MSc 達が集まった。我々もこの記念式典に臨んだが、ここでは、海外の最新事情を知る一助として、研究発表の概要を紹介する。

研究報告概要

メイン・セッションのプログラムは、疾病調査、病理学、毒性学、野生動物医学、保全医学、サル類医学、英国産生物の保全活動、両生爬虫類医学、水生生物医学、エキゾチック哺乳類医学および鳥類医学に分けられ、計 55 題の報告があった。以下に、セッションの題名と発表者名・所属 (MSc 出身者は * を付す) を記す。

1) 疾病調査: Milton Friend (米野生生物健康センター)、Richard Jakob-Hoff (ニュージーランド・オークランド動物園) および Eric Miller (米セントルイス市立動物園) による米国、ニュージーランドおよびガラパゴス諸島における野生動物医学の調査研究の概要、P. Heyman (仏リヨン獣医大学) によるヨーロッパ産ドブネズミにおける韓国型出血熱ウイルス保有状況

2) 病理学: Alun Williams (RVC) による動物園におけるブライオン病の発生状況、Phill Elliott* (ZSL) によるクジラ類の脂

肪栓塞致死例、浅川* による宿主-寄生体関係の外來種問題、Andrew Breed* (ZSL) によるオオコウモリ類におけるヘンドラウイルスの新たな検出法の開発、Vic Simpson (英野生動物医学研究所) による南部英国におけるノスリ骨格の栄養性異常症例

3) 毒性学: 斎藤による北海道産ワシ類の鉛中毒症例、Jonathan Sleeman (米バージニア州野生生物センター) による野生ハコガメ類の口腔内膿瘍の発生と生態系の健康度の指標化、Gracia Vila-Garcia* (ZSL) による PCB 類体内蓄積によるスナメリ乳腺へ影響の組織病理学的検討、Almira Hoogesteyn* (ブラジル野生生物保護協会) による PCB 類による内分泌器官への影響

4) 野生動物医学: Eric Miller (前出) による自然生態系保全活動における動物園獣医師の役割、Khyne Mar* (英ウオールム保護教育センターおよび同サファリパーク) によるアジアゾウの繁殖プロジェクト概要、Jonathan Sleeman (前出) による臨床野生動物医の任務、F Gual-Sill* (メキシコ市チャプレテック動物園) による同園におけるジャイアントパンダの繁殖管理、Kerri Morgan (ニュージーランド・マッセイ大学) によるキウイにおける内臓幼虫移行症

5) 保全医学: Edmund Flach (ZSL) による英国へのクイナ類 (*Crex crex*) 再導入計画に関わる獣医学的対応、Christine Reed (ニュージーランド農林省) による感染症管理によるニュージーランド固有種の保全、Eric Miller (前出) による中国でのジャイアントパンダの生物医学調査、Romain Pizzi* (英エディンバラ動物園) による寄生体保護を念頭に置いた野生動物医学、Allison German* (英リバプール大学) による日本脳炎ウイルス媒介者としてのサギ類の東南アジアでの役割

6) サル類医学: Adrian Mutlow* (米カンサス大学) によるチンパンジーの腹腔尿道形成術手技と予後、Jonathan Sleeman (前出) によるアフリカでの類人猿の感染症管理、Hanspeter Steinmetz* (スイス・チューリッヒ大学) による飼育下ライオンタマリンの飼育環境の違いによる疾病調査結果、Jorge Paredes* (ガボン・ゴリラ保護計画グループ) による西ローランドゴリラ再導入個体群で認められた致死性腸結節虫症

7) 英国産生物の保全活動: Tony Sainsbury (ZSL) による人為的に移入されたと考えられるボックスウイルスによるキタリス個体群の危機的状況、Yedra Feltrer* (ZSL) によるイングランド北部の野生下のアオサギに認められた骨格異常とその致死例、Katherine Whitwell (英ウマの疾病コンサルタント事務所) によるウサギ類の自律神経機能不全症、Dick Best (英野生生物リハビリテーション会議) による救護活動における係わり、David



写真1 本シンポジウム要旨集の表紙

Martinez Jimenez* (ZSL) によるキタリスの新種と考えられるアデノウイルスに起因した感染例, Paul Duff (英獣医学ラボ・エージェンシー) によるキツネ発情期における噛み合いに起因した致死例

8) 両生爬虫類医学: Peer Zwart (蘭コトレヒト大学) によるリクガメ類甲羅軟化症の病因論的および病理学的検索, Peer Zwart (同) による欧州産ヘビ類 (*Vipera* 属) における *Chlamydophila* 性胃食道炎, Simona Pejrilova* (チェコ獣医学) によるグリーンイグアナにおける血液および生化学的性状の個体発生学的検討, Michael Waters* (RVC) による英国産カメ類のヘルペスウイルスおよびマイコプラズマ症, Vicki Chalker* (英エディンバラ大学) によるドクトカゲ類 (*Heloderma* 属) の獣医学

9) 水生生物医学: Andrew Routh (ZSL) によるミズオオトカゲの疾病, Michael Waters* (前出) によるサメ類の血液学, Sue Thornton (国際動物園獣医師グループ) によるイルカ類へのワクチネーション, Sophie Labrut (仏ナンテ獣医大学) による飼育タテゴトアザラシの麻酔および開腹術, T. Bouts (英ドッチイ動物病院) によるニシキゴイの内視鏡術

10) エキゾチック哺乳類医学: Eric Miller (前出) によるクロサイの疾病と獣医学的研究の総説, Taina Strike* (ZSL) による

超音波診断, 内視鏡および糞中ホルモンの測定を用いたスマートラトラ雌個体の不妊症治療例, Debra Bourne (スペイン野生生物情報ネットワーク) による痛みの表現が不明瞭な stoical 種における疼痛管理, Catherine Roach (RVC 学生) によるフェレットのワクチネーション, Kathryn Thirwall (RVC 学生) によるモルモットの卵巣嚢腫診断

11) 鳥類医学: Francis Scullion (アイルランド, WAWV 会長) によるレース鳩若齢個体の病理学的検討, Romain Pizzi (前出) によるアマゾンパロットの頸部気嚢除去術, Nadia Worrall (RVC 学生) による側および背臥姿勢における麻酔下の鳥類数種の capnography を用いた二酸化炭素濃度の比較, Jean-Michael Hatt* (スイス・チューリッヒ大学) による tubular external fixator (FESSA.) を用いた猛禽類骨折治療法の確立, Natalie Mauroo* (香港オーシャンパーク) によるチリフラミンゴの骨肉種症例

ポスター: Barbara Daffner* (レーハンブトン大学) による英国産コウモリ類致死性疾患の病因解析と動物由来感染症病原体の疫学調査, J. M. Rijks* (蘭野生生物ヘルスセンター) による 2002 年オランダにおけるアザラシジステンパーの記載疫学, G.H. van Bolhuis* (蘭野生生物ヘルスセンター) によるハクチョウに寄生した住血吸虫類 *Trichobilharzia* sp. の病理学的検討



写真2 シンポジウムに参加したMSc達
(同窓生マルタ所有の写真を拝借)

その他の企画：宴会2つを除くと、いくつかのロンドン動物園のバックヤード・ツアーやMSc講義を兼ねたサテライトミーティング（水棲動物医学，無脊椎動物医学およびエキゾチック哺乳類医学など）が平行して進行していた。浅川は，現役MSc生に混じって，エキゾチック哺乳類医学（ウサギとフェレットの診療）の講義に参加したが，18名の参加者のうち男性が3名，相変わらず，女性優勢のコースと再確認した。優秀発表者への授賞式もあり，学生部門ではモルモットの発表をした方が，また，一般の部ではJean-Michael（コースの2期生）がそれぞれ授賞した。RVCの学生さん3名はいずれも，卒業研究で取り組んだ女学生であった。

おわりに

奇しくも，日本野生動物医学学会が創立されたのと同時に，英国ではここで紹介した専門職大学院が開講された。その間，日本での獣医大学における野生動物医学教育の進展状況は，概して牛歩の如きものであろうが，着実に進展している。いつかは，本学会の総力を結集して，専門職大学院を日本でも開講したいものである。（以下，浅川の独白）私の同期生（6期：2001年9月修了）15名中10名がこのシンポジウムに参加し，4名が研究報告をした。ロンドン動物園に勤務したイェドラ（第7セッションの2番目に報告）は，臨月を押し切って発表，このシンポが終了して6日後，ご本人から無事に出産のメールを頂いた。そして，彼らの多くは，英国野生動物保護協会やリンクス保護計画，野生動物保護センターなどでパーマネントの職を得ていた点は，冒頭述べたように，本コースが「職」に貢献している証左であろう。博士課程への進学を目指すものや彼らの中で結婚したものもあり嬉しくなる。今回，欠席のアメリカ・ローラは，ブロンクス動物園で西ナイル対

策でてんてこ舞いなのか。まあ，AAZV かなにかで再会するだろう…。

（追記）

本原稿を提出した後，野生動物医学修士課程の現副主任 Tony Sainsbury（ロンドン動物学会 / ロンドン動物園主任獣医師）が，修了者に送付したメール版ニューズレター（2005年3月4日）を受け取りました。そこで，彼に許可を得て，以下にその翻訳したものを紹介いたします。

11月13日夕刻，ロンドン動物園構内にあるアルバート皇太子記念ホールで，ロンドン動物学会主催の「野生動物医学修士課程創立10周年記念式典」を行った。この式典には，127名の修士課程修了者のうち45名が（遠くは日本，ブータン，オーストラリアなどから），現在学ぶ10期生とともに出席した（集合写真参照：同課程教員も含まれる）。ほかに，今回の記念学術集会を共同で主催した四団体，すなわち The British Veterinary Zoological Society, World Association of Wildlife Veterinarians, The Royal Veterinary College, The Zoological Society of London からの有志も多数であった。まず，修士課程・前副主任の J. Kirkwood 教授（現 The Universities Federation for Animal Welfare 科学部門主任）が，創立当時から限らない協力を頂いた M. Friend 博士（米国の The National Wildlife Health Center, 前センター長）に謝意を表し，次いで Friend 博士から記念講演（題名 Masters Course in Wild Animal Health - a Decade of Contribution）を頂いた。その中で，「世界的な新興・再興感染症の出現で，野生動物の生存に重大な危機が生じている。これに果敢に挑戦する野生動物医を輩出した本修士課程の役割は，今後，益々高まる。諸君はそれぞれの母国で野生動物の健康管理において，主導的な役割を果たすべし」と鼓舞された。さらに，「生物多様性の保全に成功を治めようとするならば，変動する人間社会あるいは自然生態系の中であって，いかなる機序で新たな疾病が生ずるのか，その深い洞察力と具体的対処法を担う獣医学や動物学に基盤を置く，正統的教育研究があつてこそ，実現可能！」と締め括った。